



Title	「カナダからのプレゼント」：留学体験から学んだもの
Author(s)	田中， 四郎
Citation	大阪外国語大学論集. 1993, 9, p. 213-223
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79610
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「カナダからのプレゼント」 —留学体験から学んだもの—

田 中 四 郎

PRESENT FROM CANADA —Learned from experience of study abroad—

まえがき

本稿は、昨年の秋、箕面市立第六中学校のPTA・豊川北小学校区青少年を守る会及び東小学校区青少年を守る会主催の講演のために準備した原稿に手を加えて書き直したものであります。本稿が、留学生との交流に対する理解を深めるための一助になれば、幸いに思います。

私は、将来次のような四つの趣味を楽しみながら、後半の人生を有意義なものにしたいと思っています。現在、カレーライス・チャーハン・味噌汁・ハムエッグ程度の料理しかできませんが、将来は料理学校に通いながら色々な料理を作って、成人病対策に役立てたいと考えています。音楽の鑑賞は、ストレスを解消するのに大変効果があると聞いたので、毎日クラシックミュージックのCDを鑑賞しています。現在、子育てに忙しいが、将来は夫婦同伴で演奏会やディナーショーにも行きたいと思っています。我々人間は、年齢に関わらず、色々な人の世話にならなければ生きていけません。そんな自分ではありますが、将来は熱帯魚の飼育の方法を勉強して、いつまでも生きものの世話ができる人間でありたいと願っています。高齢化社会での人間にとって大切なものは、健康と生きがいそれから経済的な支えということだそうです。しかし、その中で最も大切なのが、健康の管理ではないかと思います。そんなわけで、現在は毎朝簡単なストレッチングと気功法を実践しています。将来は、本場中国の気功法を本格的に鍛錬したいと考えています。

0. はじめに

本日は、私のような足りないものに、このような機会を与えて頂き、誠にありがとうございます。只今、司会の方からご紹介頂きました田中四郎です。これから一時間半程、皆様のお耳を拝借してお話をさせていただきますが、どうぞよろしくお願いいたします。

日頃、大阪外国語大学の留学生との交流のために、公私共にご尽力くださりまして、誠にありが

とうございます。この場を借りまして、厚くお礼申し上げます。

さて、本日の講演テーマは「カナダからのプレゼント・・留学体験から学んだもの」です。何が、プレゼントであったかは、お話をきいて頂ければ、お分りになることと思いますが、話の要点は、「交流」「教育」そして「健康」の三つであります。

本題に入る前に先日皆様が、手にした今回の講演のチラシに書いてある私の趣味について少々おっはなしたいと思います。それは、「料理」「音楽鑑賞」「熱帯魚の飼育」そして「気功法の実践」です。チラシには、それぞれの趣味についてコメントを入れておきました。先ず最初の「料理」ですが、これはつまり「食文化」のことです。料理には、作る楽しみ、食べる楽しみ、食べて頂く楽しみ、それから工夫する楽しみと色々あるわけです。次の「音楽鑑賞」ですが、音楽は世界中何処に行ってもあります。つまり、音楽には国境がありません。人類が、声を発した時から音を楽しんでいたのではないのでしょうか。その次の「熱帯魚の飼育」ですが、これは明らかに「生きもの」の世話です。そんなわけで、飼育する対象は、イグワナ、金魚、盆栽用の松、犬猫……といった具合に生きものだったら何でもいいわけです。つまり年寄りになっても何か生きものを飼育することによって、自分自身が世話される側だけでなく、世話をする側になって生命の有り難さを感じられていればいいと思います。最後の「気功法の実践」ですが、これは心身の「健康管理」ということになります。もうお分りになった人もいるかと思いますが、先程お話ししました、今日の演題の三つの要点であります「交流」「教育」そして「健康」が、私の趣味としようとする中身になるわけです。もう、今日のお話の要点を説明もしましたから、お急ぎの方は、もうお帰りになって頂いても結構かと思います。但し、結論は、最後にとっておくことにしましょう。

1. 生い立ち

私は、終戦後の後始末に一段落付いた頃の、昭和23年に東京の北区で田中家の四男として誕生しました。その頃の日本は、まだまだ経済的に不安定な時代でしたので、巷では貧・病・争の厳しい生活を送っておりました。私の家も大変だったようですが、今は亡き父が営んでおりましたクリーニング業のお陰で、一家六人は何とか無事に生活することができました。その頃の東京の道路は、まだ舗装されていない所が沢山あったり、便所も汲み取り式だったので、小学校の低学年の頃までは業者の方が肥え桶を荷馬車で引いていたのを覚えております。したがって、荷馬車が通り過ぎた後には、幾つかの馬糞が道路に落ちていました。その頃の私の家の近くには、空襲の時の焼け野原が残っておりましたので、そこへよく蜥蜴や昆虫を取りに行ったものです。そこには沢山の瓦が残っていましたので、その瓦の破片を空手の真似をして割ったりして、近所の子供たちと腕比べをしたものです。その頃の子供たちの間では、無言のうちにリーダーが決まり、いつもその子の掛け声で仲間が集まり、色々な遊びが始まったものです。その頃は、まだ電動式の玩具は数が少なかったので、もっぱらビー玉やベィー駒あるいはメンコのたぐいでした。また、近所の空き地を利用して三角ベース・ボールなどをして遊んだものです。その頃の子供たちの遊び仲間の年齢層は、小学

校にも行かない子供から小学の上級生まであり、自然に縦割りの集団が出来上がっていたように思います。

2. 生命の尊さ

私には兄が三人いますが、上の二人は戦中の生まれで、長男とは歳が七つ程離れております。したがって、三人目の兄と私は戦後父が戦地から帰ってきからの子供たちになる訳です。戦時中の兄たちは、母と共に長野県の親類の家に疎開していましたので、きっと野山を駆け回っていたのだと思います。終戦後、戦地から多くの兵隊さんたちが帰ってきましたが、その多くの人たちは何らかの形で命拾いをして本国に帰還してきた訳です。私たちの父もそのような人たちの一人でした。今は亡き父から聞いた話ですが、出征した父は、1,000人程乗せた輸送船で南の島へ向かって航海をしていたそうです。その船に乗っていた父は、船内と甲板の寝床を戦友と交替しながら寝苦しい夜を過ごしていたそうです。そんな静寂な夜を敵方の魚雷は、一瞬にして悲惨な地獄の夜と化してしまいました。父は運よくその晩は、甲板にいたので助かりましたが、父の戦友は不運にもその爆撃により海の藻屑と化してしまいました。父はその晩のことを次のように語ってくれました。乗っていた船に魚雷を受けた瞬間ドーンと爆発音が鳴り響き、大きな火柱が甲板から花火のように吹き上げたそうです。その後は、サイレンと悲鳴が入り乱れ、船はあつというまに海中に沈んでいったとのことです。海に飛び込んで助かった父は、その後三日三晩飲まず食わずの状態で、体力的にも限界だったそうです。しかし、父の運は再び巡ってきました。というのは、後半日も保たなかった父の前に、本国からの輸送船が通りかかり、救助されたからです。このような運命的な出来事があったお陰で、私はこの世に生まれるチャンスを頂いた訳です。

3. 体操競技との出会い

私たちの小学校時代の一番の人気スポーツといえば、野球でした。ちょっと大げさに聞こえるかも知れませんが、その頃の子供たちだったらだれでも一度は、プロ野球の選手になりたいと夢を描いたことでしょう。私もそんな少年の一人として、クラスや近所の仲間と近くのグラウンドに行ったものです。そんな訳で、中学校に行ったら野球部に入部しようと心に決めておりました。しかし、そんな私の心に変化が起きました。中学校の入学式が終わり、家に帰ろうと校庭を横切っていたら、その中学校の体操部の部員たちが、校庭の片隅で練習を開始しておりました。その時、部員の一人の生徒が高鉄棒で前方へ後方へと大きく回転しておりました。このような技は、その頃のオリンピック選手の竹本選手や小野選手らが、テレビのなかでやっているのを何度も見たことがありました。しかし、実際に目の前で、それも自分と同じような年令の子供がやっているのを見たのは、その時が初めてでした。その時の一瞬の感動が、私の心を変えてしまったのでした。今考えてみると、私の一生を変えてしまったといっても、決して過言ではないと思います。私にその感動を与えてくれたその生徒は、後にオリンピックの日本代表になり、世界にその名を残す大選手になりました。

た。

4. カナダへの留学

さて、話は大学時代になりますが、私がどのようにしてカナダに留学するようになったかについて話をしようと思います。カナダへの留学の機会をつかんだのは、私にとって好運な出来事でした。その頃の学生が外国に行くということは、若者にとっての憧れであり夢物語のことでした。しかし、好運にもその夢が、大学を卒業したその年の23才の時に実現しました。もう20年以上も前のことになります。その頃の日本は、経済的には安定しておりましたが、異文化交流とか国際交流等の言葉は、一般の大衆にはあまり馴染みのある言葉ではありませんでした。先程のカナダ行きの好運な出来事についてですが、その好運は、ある女子選手の不幸な出来事があったために実現しました。この旅行には、その年の世界選手権大会に出場していたチームの男女一名の選手と大学の恩師の三人で行く予定でした。しかし、不運にもその時の女子選手が、試合中に膝の靭帯を切断してしまったので、私が彼女の代わりにカナダ遠征に参加することになった訳です。そして、私が初めて日本を離れたのは、忘れもしない1971年の7月6日という初夏の夕方でした。この日、運命をともにしたのは、大学の恩師と先程の中学時代に出合った先輩の三人でした。私たちは、大勢の諸先生方や学友たちに見送られて、羽田国際空港をカナディアン・パシフィック航空の DC8 というその当時の大型飛行機で、カナダに向けて出発しました。私たちを乗せた飛行機は、アンカレッジを経由してカナダのバンクーバー空港に13時間程掛かって到着しました。そこから私にとって、未知の世界での異文化交流の体験が始まりました。

5. 異文化交流で得たもの

私たち人間は、自分の生まれ育った国の風俗や習慣に影響されながら日常の行動や生活様式までが、知らず知らずのうちに形成されてしまいます。そんな訳で、私は23年間の日本での生活を通して培われた、文化背景をもって異文化のカナダという国に入った訳です。私はそこでの異文化コミュニケーションの生活を通して、次のことを学ぶことができました。

- (1) 異文化の背景をもつ人間に対する自分自身の誤解と偏見を教えてもらった。
- (2) 異文化圏での人間関係で変えるのは相手ではなく自分自身だったと分かった。
- (3) 異文化を理解し受け入れるとともに、自国の文化を伝えるという相互作用を通してお互いの理解を深めることが大切だと学ばせてもらった。

私たち人間は、どうも外界にある同じ物や現象を見ている、それを見る人の心のあり方によって違ったものに見えたり、感じたりするらしい。その具体例として次の二つの例で説明してみよう。

例1：一輪のバラの花とそれを見る人たち

あるテーブルの上に一輪のバラの花が生けてあるとします。そして、そのバラの花を何人かの人が見ていたとします。それでは、その人たちの心のなかにはどのような思考形成が、なされているのでしょうか。

木村さん：きれいだな。鈴木さん：何処で買ったのかな。川上さん：新しいのかな。

佐藤さん：恋人にあげたいな。渡辺さん：母が亡くなった日にもバラの花があったな。

上記のように、様々なことが頭に浮かぶことでしょう。そこで、木村さんと渡辺さんを比べてみた場合、二人の気持ちには大きな違いがあることに気が付きます。このようなことが、私たちの日常生活の中でも、同じようなことがいくらかでも起こっているのではないのでしょうか。

例2：丸と四角は同じか違うか

黒板に丸と四角が書いてあるとします。その二つの図形に対して、それは同じか違うかと聞かれた時、私たちは何とこたえるでしょう。

一般常識からすれば、ほとんどの人がその図形は違いますというでしょう。しかし、誰かが、それは同じですという人がいたとしたら、違うと答えた人たちは、彼のことをどのように思うでしょう。

この丸と四角を違うと言った人は、馬鹿でも変な人でもありません。肉眼で見える図形だけを見ていたのではありませんでした。つまり、子供の頃に学んだ幾何学にでてくる、円筒形の物体を頭に浮かべていたのです。このように、同じ物を見ていても別の人が見れば、違って見えたりしても決して不思議なことではないのです。そんな訳で、私たちの人間関係で行われているコミュニケーションに使われる言葉の解釈にもこのようなことが往々にして起こっております。

6. カナダでの生活

カナダで最初に生活をするようになった町は、その当時人口約50万人のアルバーター州で一番大きなエドモントン市でした。私はこのエドモントンにある、アルバーター州立大学の体育学部の助手として留学しました。当時の1ドル紙幣は確かまだ350～360円だったと思いますが、私の助手としての契約金は、前期後期合わせて1,000ドルでした。当時の物価がいくら安かったとはいえ、私の給料では一年間生活することは不可能でした。そのことを理解していた私の上司の紹介で、大学院生のアパートの一室を無料で3ヶ月滞在することができました。その後、6ヶ月程他の大学院生のご両親の家に、これもまた無料でお世話になりました。その後は、若手の先生方の友達5人で借りてあった大きな一軒家の地下にあるリビングルームに折り畳み式のベッドを借りて無料で3ヶ月程住み込みました。但し、この時から月に100ドルの食事代は支払うようになりました。私のカナダでの生活は、大勢の心ある人たちに助けられて始まりました。

さて、ここで忘れてはならないことが一つあります。それは、アルバーター大学が私のために、無料で英語の集中授業を受けさせてくれたり、一年分の学生寮の食事券を提供してくれました。こ

のような、親切なもてなしがあったので、なんとか無事に一年間を過ごすことができた訳です。今までは、「食と住」について簡単に説明しましたが、次は、「衣」について話をしようと思います。カナダが日本と同じような気候でしたら、何にも問題はありますが、エドモントンの冬は北海道の冬を二倍にした程寒さの厳しい所でした。一月と二月には氷点下30度とか40度が毎日のようにつづきました。したがって、私の服装も当然日本にいた頃とはだいぶ違った出で立ちになりました。少々長めで厚手のブーツにブルージーンズ、それに厚手のジャンパーと耳がかぶさる帽子、それからこれを忘れたら外に出ていられないという、皮の手袋といった服装です。さて、これだけ着込んだら暖かいだろうと思ったら大間違いで、ただなんとか寒さを我慢できるという程度でした。そんな具合ですから、当然12月から3月頃までは室内に入る時間が長くなりました。しかし、カナダの建物は全てセントラルヒーティングシステムになっているので、何処に行っても快適でした。また、カナダは湿度が低いので、日本の冬とは違って骨身にしみるといった寒さではありませんでした。そんな訳で、カナダでの約半年間は野外での活動よりも、室内で出来るホームパーティーが多く行われたように思います。また、一年間で一番勉強のしやすい時期でもありました。カナダの学生たちは、9月から翌年の4月は大学で勉強し、5月から8月の休暇中にはアルバイトをしながら社会勉強をするといった具合でした。

7. ことばの問題

さて、今度は日常生活に欠かせない言葉の問題です。私は、大学を卒業しても外大の学生のように英語が話せませんでしたので、留学当初は大変苦勞をしました。しかし人間と言うものは面白いもので、日常生活の環境や条件が変わると好きというよりも嫌いだった英語に興味が出てきて一生懸命に勉強するようになりました。先程話しました、アルバーター大学の英語集中授業に毎日通うようになりました。私は初級クラスの授業を受けました。これは当たり前のことですが、全てが英語で、先生の話すスピードに変化がありませんでしたので、はじめの1～2ヶ月はとてもついていけませんでした。そこで、私は次のことを決心して実行することにしました。

1. 煙草を吸うのをやめる。(現在も進行中)
2. アルコール類は、パーティー以外の時は買わない。(現在は、5年ごとに1年間禁酒に変更)
3. 日本語の本は専門書以外は読まない。(2年間実行)
4. 在住の日本人とは交際しないようにする。(2年間実行)
5. 英語の辞書を全部読み通す。(2年間で終了)

以上のことが、割りと問題なく実行できたのも、学生時代に励んだスポーツの経験や恩師から学んだ「成功の三段思考」のお陰であったと感謝しています。

- (1) やりたい (欲求) ……………目標設定
- (2) できる (信念) ……………実行計画
- (3) やりとげる (意志) ……………時間活用

8. アキレス腱の断裂

私はカナダに留学して半年後に、学生たちの試合に引率していった時にアキレス腱を切ってしまいました。しかし、好運にも引率したチームの中に医学生がいたお陰で、すぐにエドモントンにあるアルバーター大学病院に連絡が取れ、翌日の朝一番に手術を受けれるように手配されました。手術は、無事に終わりましたが、日本では考えられないことが待ち受けておりました。日本では、普通アキレス腱を切ると一ヶ月程入院しますが、カナダではなんとたった五日間の入院でした。まだ驚くことが続きました。それは私が病院から退院した翌日のことです。クラブの監督が仕事の都合で引率できないから、私が代わりに明日から二日間アメリカのモンタナ州にあるリビングス市まで学生の試合に同行してほしいとのことでした。監督も学生たちも不安そうな顔をせず、ニコニコ笑って大丈夫というのでした。そんな訳で、私はまだまだ十分痛みの残る左足を車のフロントウインドウの前に乗せて、2台のステーションワゴンで16時間程かかって行きました。そして、カナダとアメリカの国境の検問所で、私は、自分のパスポートを持ってくるのを忘れたことに気が付きました。その時のアメリカの検問官と私たちとのやりとりが面白かったのです。私は彼らのコーチではありましたが、英語がまだよく話せませんでしたし、足には石膏をはめて松葉杖ですから信用してもらえませんでした。そこで、私は黄色くなっている豆だらけの手のひらを見せました。すると、検問官の、Oh! That's great! の一言で、許可が出ました。まさか自分の手のひらがパスポートの代用品になるとは夢にも思いませんでした。

9. 国際化について

国際化、国際人、国際交流という言葉が、一般大衆の目や耳によく入るようになったのは、ここ数年のことだと思います。これにはいくつかの要因があると思いますが、その一つには日本の経済力がとうとう国際経済に大きな影響を与えるようになってきたからだと思います。その次に、情報の伝達方法が、飛躍的に進歩したためにあらゆる国のニュースが即座に日本に入ってくるようになったからだと思います。その外に考えられるのが、1983年に文部省より提出された「21世紀への留学生政策」です。21世紀までに、留学生を十万人まで受け入れようというのですから大変です。このような現象は、大学機関に限らず外資系の企業も21世紀に向けて様々な行動に出ております。日本人はよく、島国根性的な物の考え方や感じ方で外国人と話をするので、相手の人に自分のことを理解させたり、説得する技術が不足しているといわれます。これはどうも日本国の地理的条件や歴史的な背景に原因がありそうです。日本は何回となく他国の文化や芸術あるいは技術というものを取り入れてきましたが、今日ほど多くの国から色々なものが入ってくる時代は、かつてありません

でした。そんな訳で、最近では国際社会における経済摩擦や政治的問題等で、色々な問題に直面しはじめることになりました。したがって、これからの日本は、国際社会に対してどのようなことが出来るかを考え、かつ実行していかなければ、世界の国々から批判を浴び、孤立してしまうのではないのでしょうか。そうならないためにもこれからは色々な分野における国際交流が重要になってきたといえます。

10. 留学生の支え

現在、私は大阪外国語大学留学生日本語教育センターの教官をして、勤務しております。私の役割は、主に留学生会館に居住する留学生の勉強や生活に関する問題を聞いてやり、その解決策を共に考えてやることです。また、留学生の健康管理に対する認識や課外教育への参加を援助してやることです。当センターには、毎年約300から400名の留学生が世界中からやってきます。現在、留学生の約8割が、アジアからの留学生です。留学生のほとんどは、当センターで6ヶ月間の日本語の教育を受けた後、次の大学において専門の研究生活をするようになります。留学生にとって一番辛いことは、家族と離れて生活することです。二番目は、言葉が通じないということです。そして三番目が、食物だそうです。有り難いことに、私たちは家族や言葉そして食物には何ら問題なく生活しております。以上、辛い条件のベスト3を見て分かることは、一番めが生きるために絶対必要な食物ではなく、自分のそばにいてくれる家族であり、二番目がその家族とのコミュニケーションということです。そんな訳ですから、彼らが月に一度や二度する国際電話での家族との会話が、彼らの留学生生活を支えるエネルギーになっているかが分かります。本学の留学生は、本国の厳しい審査によって選ばれた、優秀な国費留学生たちですが、その多くの留学生は、とても信心深い人が多いということです。留学生の宗教には、イスラム教・キリスト教あるいは仏教といったように様々ではありますが、各宗教の共通点であります「祈り」を通して日々の生活を乗り切っているようです。

11. 美幸さんとの出会い

二年程前に行われた全国一斉の大学入試センターでのできごとです。私の勤務する大学では、久しぶりに点字問題集による受験生が一名参加することになりました。そして、私が、その受験生の監督することになりました。最初、監督するとはいっても彼女は目が不自由なので、何を監督したらいいのか困ってしまいました。しかし、そんな彼女を一日中見つめていたら、その時まで気が付かなかったことが分かりました。はじめ、私は彼女を監督することや時間の長さに気を取られていました。しかし、その内部屋の温度の変化に気が付き、彼女の気持ちを考えてやり窓を開けたり閉めたりしてやりました。そんなことをしている間に、本当は自分が監督されているのだと気が付いたのです。そのことを手紙にして、彼女に渡すことにしました。その手紙は目の不自由な彼女には読めないと分かっているにもかかわらずにはいらませんでした。

頑張れ美幸さん

前略 昨日に続き今日と二日間に渡る長い試験でしたがよく頑張りましたね。ご苦労様でした。貴女は、目が不自由なのに上手にタイプを打っていましたね。カタン、カタン、ジー、カタン、チーン！という音が、私の耳にはとても可愛く聞こえましたよ。きっと、貴女には、私たちには見えないものがよく見えるのでしょうね。貴女を見ていたら去年の暮れ病気のために、60才の年齢で亡くなられた東京の友人だった聾啞学校の先生を思い出しました。そして、その先生の生前の仕事ぶりが、貴女のお陰で少しは見えてきたような気がしました。貴女の付き添いでこられたお母さまは、とてもやさしい人ですね。一目お会いしただけで、その優しさが伝わってきましたよ。きっと貴女の家族の人たちもみんなそうなんでしょうね。また、貴女の学校の先生たちもそうなんでしょうね。私たちは、毎朝眼を覚ましてから床に入るまで、意識しなくても色々なものが眼に入ってくるのですが、本当は何も見えていないのかも知れませんね。そんな私の心を貴女は私に教えてくださいました。美幸さんありがとう！美幸さん頑張れ！

草々

12. 今世紀最大の発見

地球がこの宇宙に誕生したのは、今から約46億年も大昔のことだそうです。また、地球上に生命が出現しだしたのが、約38億年前だったそうです。もうそれだけ聞いただけで、気が遠くなってしまいます。しかし、それから膨大な時間がたった後の約300万年前に猿人といわれる人類の祖先が現われました。また、現代人といわれる人類が地上に現われたのは、約100万年前のことです。地球の発生から現代に至までを仮に1年間にしてみると、我々の祖先である猿人が現われた300万年前は、12月31日の午後6時18分になるそうです。キリストさまやお釈迦さまが、誕生した約2000年や2500年前は、何と1年が終わろうとする14～15秒前ということになるそうです。そんな訳で、地球の歴史や宇宙の歴史から見れば、人間の歴史はまさに始まったばかりということになります。そんな人間の意識を司る人間の脳をミクロの世界から見れば、約150億個の脳細胞から成り立っているそうです。ちょっと不謹慎と思いますが、仮に1個の脳細胞を100円と見積もると、人間の脳の値段は1兆5000億円ということになります。しかし残念なことに、人間はこの高価な150億個もある脳細胞のわずか3%～5%程しか活用していないそうです。しかし、科学者は今世紀に入りやっと人間の「心のメカニズム」を発見しました。つまり、人間には意識することのできない「潜在意識」というものがあることに気が付いたのです。それまで、自己の力ではどうすることもできないと思い込んでいた「個人の運命」は、実は不動のものではなく、我々の心のなかに潜んでいる潜在意識によって左右されていることを発見したのです。つまり、自分の人生はあるいは運命は、その人の「意識」つまり、ものの見方や考え方あるいは感じ方が変われば、自分の行動が変わり、行動が変われば「習慣」つまり日々の生活が変わります。その人の習慣が、変われば「性格」が変わり、性格が変わればその人の「人格」まで変わってくる訳です。そんな訳で、自分の意識が変わ

ればその人の人生や運命が変わる訳です。しかし、自分を今より向上するためには、次のような大切な条件があります。自分を信じ、自分の心の底にある潜在意識の力を信じて、できる、できる、自分にはきっとできると「常に肯定的思考」で、物事を受け止める努力を惜しまないことだそうです。次のようなよい例があります。林原生物科学研究所からの報告ですが、三ッ葉のクローバーに対し朝晩の二回四つ葉になれば、四つ葉になればと心をこめていい続けると、ちゃんと四つ葉になったということです。あるいは、ノーベル賞受賞者のルーサー・パーバーク博士の報告ですが、バラに向かって「愛情のこもった言葉で表現し、外部からの危険を恐れる必要がないことを保証し続けました」するとなんと三世代後に、バラは刺を落したというではありませんか。現在は、これらのことが養鶏場や牧場あるいはお茶や葡萄園で利用されております。動植物でさえ、このようなことが起こるので、ましてや人間同志ではなおさらのことだと思います。このようなことは2500年前に、お釈迦さまが「善因善果・悪因悪果」という言葉で説き明かしておりました。しかし、私たちは頭で分かっている、なかなか思うように行動ができず、右往左往しているのではないのでしょうか。

13. 人間の交流分析

皆さんも時々考えることと思いますが、私も、自分の半生を振り返りながら「教育とは何だ」と考える時があります。先程も出ましたが、私たちはどうやら因果応報の連続の世界に生かされているようです。そんな訳で、どうしても出てきた結果や現象に振り回されて、一喜一憂しているようです。結果が良くて、楽しいときにはまだましですが、その反対で、結果が思わしくなかったりしたときにはどうしたらいいのでしょうか。その時には、その原因を考える必要があります。そこで、人間関係の交流分析の学者でありますアメリカのトーマス・ハリス博士の分析法を簡単にご紹介いたします。

- (1) 私はOK、あなたもOKです：（健全）仕事と余暇の調和がよくとれているので、ストレス解消が上手な人です。
- (2) 私はOK、あなたはOKではない：（ヒステリック性格）自己愛が強く、他者を責める事によってストレスを解消しようとする。
- (3) 私はOKではないが、あなたはOK：（劣等感）問題に出会うと、逃避して問題を解決しようとする。
- (4) 私はOKではないし、あなたもOKではない：（自閉症）否定的で、物事を絶望的な反応で解消しようとする。

ハリス博士によりますと、人間関係を良くするためには（1）のように自他共に認めあう関係が大切だということです。つまり、教育とは、師弟や親子や年齢差や性別にこだわりなく、お互いに

理解しあい、共に学び合う関係ということになるのではないのでしょうか。人類の歴史は、「食の時代」から「物の時代」になり、そして「金の時代」に移り、現代は「情報の時代」と言われております。しかし、その昔から大切にされてきた何かが失われつつあるのではないのでしょうか。それは言うまでもなく、「人間の心」です。これまでの日本は、先進国に追い付け追い越せの精神でやってきました。その結果、日本はとうとう世界一の経済大国になってしまいました。そんな訳で、これからの日本は自国の繁栄のためだけの経済のあり方では、世界の仲間から嫌われてしまいます。もう既にそのような傾向が現われております。したがって、これからは相手国に喜んでもらえるような外交政策や国際交流の仕方が必要な時期に来ているのではないのでしょうか。私たち人類には、次のような共通の願いがあります。

- (1) 向上の願い（今より良くなりたいという向上心）
- (2) 平等の願い（差別されずにみんなと共に生きたい）
- (3) 自由の願い（束縛されずに主体的に行動したい）
- (4) 貢献の願い（できることなら社会のためになることをしたい）

このように、共通の願いがありながら、なぜ人間は争いを続けるのでしょうか。それはきっと、水面上に見える氷山のごとく、現実の世界に出てくる現象や出来事が全てだと錯覚してしまい、水面下の共通な願いが何であるかが分からなくなっているからだと思います。21世紀まで、残すところ10年足らずとなりました。そんな訳で、私も皆さまと共に、この残された20世紀末の時代に、できることをやらせて頂きたいと考えております。以上で、私の講演を終わらせて頂きます。本日は皆さま、ご清聴ありがとうございました。

参考文献

1. カナダでの異文化交流体験：田中四郎
『異文化コミュニケーションと語学教育』大阪外国語大学発行，1988
2. 二回目の成人式——回想録——：田中四郎
『大阪外国語大学論集第4号』，1990
3. 読めない手紙：田中四郎
『ささゆり』PTAの広場 豊川北小学校発行，1991
4. 『I'M OK—YOU'RE OK』by Thomas A. Harris, MD Publishers of bard, Camelot, Discus, Equinox and Fiare Books.

田中 四郎 本学助教授（留学生日本語教育センター）